

少年少女
日本文学館

5

小僧の神様・一房の葡萄

こぞう かみ いさま ひとふさ ふどう
kozō nokamisama hitofusanobudō
shiga naoya
mushanokōji saneatsu
arishima takeo



志賀直哉

しかなおや
むしやのこうじさねあつ
武者小路実篤

ありしまたけお
有島武郎

少年少女
日本文学館

5

小僧の神様・一房の葡萄

志賀直哉 武者小路実篤 有島武郎

講談社

志賀直哉 武者小路実篤 有島武郎

少女少女日本文学館 5

小僧の神様・一房の葡萄

講談社 1986

262p 23cm

内容：小僧の神様 網走まで 母の死と新しい母 正義派 清兵
 衛と瓢箪 城の崎にて 雪の遠足 焚火 赤西蠣太 小学
 生と狐 ある彫刻家 一房の葡萄 小さき者へ

しかなおや むしやのこうじさねあつ ありしまたけお

少女少女日本文学館

第五卷

小僧の神様・一房の葡萄

定価 一四四〇円

(本体 一三九八円)

一九八六年十月十八日 第一刷発行
 一九九〇年一月八日 第六刷発行

著者……………志賀直哉 武者小路実篤 有島武郎

発行者……………野間佐和子

発行所……………株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二二一

郵便番号 一一二

電話 東京(〇三三) 九四五一一一(大代表)

印刷所……………株式会社廣済堂

製本所……………黒柳製本株式会社

©志賀直吉 武者小路実篤会 一九八六年

落本・乱本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえます。なお、この本についてのお問い合わせは、児童図書第一出版部あてにお願いします。

Printed in Japan

ISBN4-06-188255-4

(児一)

も
く
じ



志賀直哉

小僧の神様……………9

網走まで……………28

母の死と新しい母……………44

正義派……………59

清兵衛と瓢箪……………72

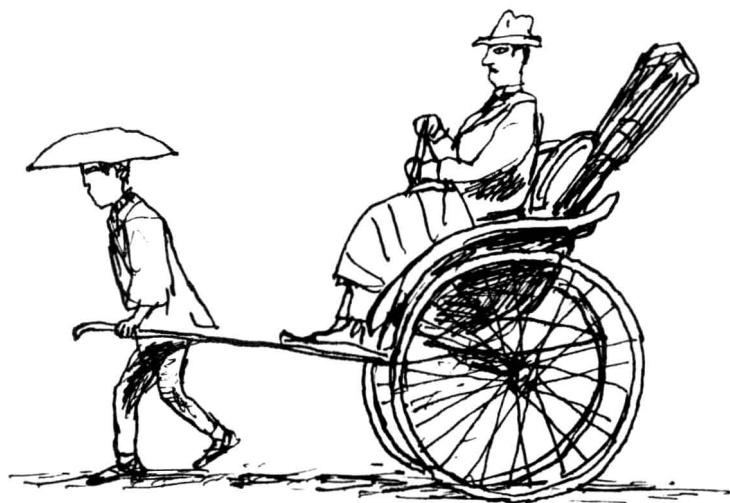
城の崎にて……………83

雪の遠足……………94

焚火……………107

赤西蠣太……………129

1888



武者小路実篤
むしやのこうじさねあつ

小学生と狐
しょうがくせい きつね
.....
161

ある彫刻家
ある ちやうこくか
.....
169

有島武郎
ありしま ぶらう

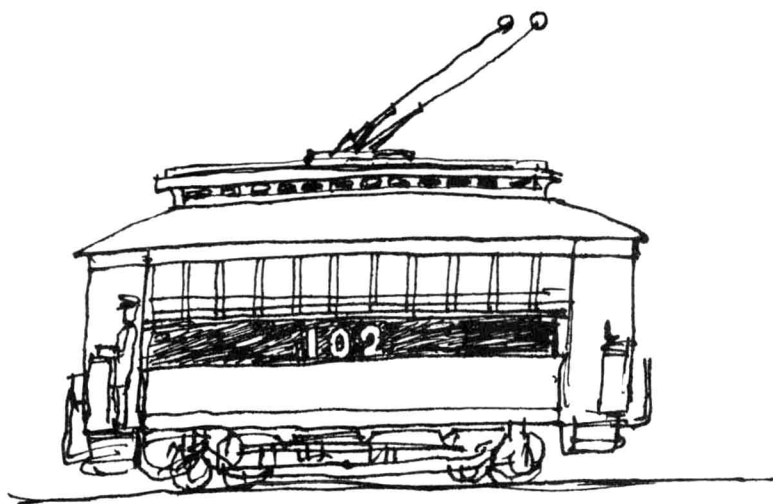
一房の葡萄
ひとつぶのぶどう
.....
211

小さき者へ
ちいさきもの
.....
224

● 解説
かいせつ
.....
248

● 随筆
ずいひつ
.....
256

● 略年譜
りやくねんぶ
.....
262



●この本の本文表記について

- 現代かなづかい、現代送りがなを使用した。
- 極端な宛て字と思われるもの、また代名詞・副詞・接続詞などのうち原文を損なうおそれが少ないと思われるものをかなにあらためた。
- 本文は総ルビとし、むずかしい語句や事項には、小さな字で注を加えた。注と本文ルビが重なる場合は左側にルビをそえた。
- さらに説明を必要とする語句や事項には、*をつけ、イラストやくわしい注をつけ加えた。

小僧の神様・一房の葡萄



志^し賀^が直^{なお}哉^や

小僧^{こぞう}の神様^{かみさま}

網走^{あほしり}まで

母^{はは}の死^しと新^{あた}しい母^{はは}

正義^{せいぎ}派^は

清兵衛^{せいべえ}と瓢箪^{ひょうたん}

城^きの崎^{さき}にて

雪^{ゆき}の遠足^{えんそく}

焚火^{たきび}

赤西^{あかにし}蠣^{かき}太^た



小僧の神様

一

仙吉は神田のある秤屋の店に奉公している。(よその家で使われること)

それは秋らしい柔らかな澄んだ陽ざしが、紺の太分はげ落ちた暖簾の下から静かに店先に差し込んでいた時だった。店には一人の客もない。帳場格子の中に坐って退屈そうに巻き煙草をふかしていた番頭が、火鉢の傍で新聞を読んでいる若い番頭にこんなふうには話しかけた。

「おい、幸さん。そろそろお前の好きな鮪の脂身が食べられる頃だね」

「ええ」

「今夜あたりどうだね。お店を仕舞ってから出かけるかね」

「結構ですな」

「外濠（江戸城の外濠に沿って走っていた路面電車）に乗って行けば十五分だ」

「そうです」

「あの家の食っちゃア、この辺のは食えないからネ」

「全くですよ」

若い番頭（少年の店員）からは少し退った然るべき位置に、前掛けの下に両手を入れて、行儀よく坐っていた

小僧の仙吉は、「ああ鮎屋の話だな」と思って聴いていた。京橋にSという同業の店がある。その

店へ時々使いに遣られるので、その鮎屋の位置だけはよく知っていた。仙吉は早く自分も番頭に

なって、そんな通らしい口をききながら、勝手にそういう家の暖簾をくぐる身分になりたいもの

だと思つた。

「何でも、与兵衛の息子が松屋の近所に店を出したということだが、幸さん、お前は知らないかい」

「へえ存じませんな。松屋というところのです」

「私もよくは聞かなかったが、いずれ今川橋の松屋だろうよ」

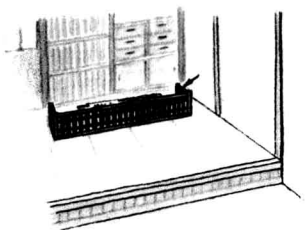
「そうですか。で、そこは旨いんですか」

秤屋（九ページ）

ものの重さをはかる、いろいろな種類のはかりを商う店。

帳場格子（九ページ）

商店などで、お金の出し入れや記帳をする場所のかこいに立てる格子。



巻き煙草（九ページ）

細長く巻いて固めたたばこ。紙巻きと葉巻がある。

火鉢（九ページ）

灰を入れ、炭火を入れて使う暖房具。



「そういう評判だ」

「やはり与兵衛ですか」

「いや、何とかいった。何屋とかいったよ。聴いたが忘れた」

仙吉は「いろいろそういう名代の店があるものだな」と思っ

ていた。そして、

「しかし旨いという全体どういう具合に旨いのだろう」そう思いながら、口の中に溜まってくる唾を、音のしないように用心しい飲み込んだ。

二

それから二、三日した日暮れだった。京橋のSまで仙吉は使に出された。出掛けに彼は番頭から電車の往復代だけを貰って出た。

外濠の電車を鍛冶橋で降りると、彼はわざと鮎屋の前を通って行った。彼は鮎屋の暖簾を見ながら、その暖簾を勢いよく分けて入った。

行く番頭達の様子を想った。その時彼はかなり腹がへっていた。脂で黄がかった鮪の鮪が想像の眼に映ると、彼は「一つでもいいから食いたいものだ」と考えた。彼は前から往復の電車賃を貰うと片道を買って帰りは歩いて来ることをよくした。今も残った四銭が懐の裏隠しでカチャカチャと鳴っている。

「四銭あれば一つは食えるが、一つ下さいともいわれないし」彼はそう諦めながら前を通り過ぎた。

Sの店での用はすぐ済んだ。彼は真鍮の小さい分銅の幾つか入った妙に重味のある小さいボール函を一つ受け取ってその店を出た。

彼は何かしら惹かれる気持ちで、もと来た道の方へ引きかえて来た。そして何気なく鮪屋の方へ折れようとすると、ふとその四つ角の反対側の横町に屋台で、同じ名の暖簾を掛けた鮪屋のあることを発見した。彼はノソノソとその方へ歩いて行つた。

三

若い貴族院議員のAは同じ議員仲間のBから、鮪の趣味は握るそばから、手摺みで食う屋台の

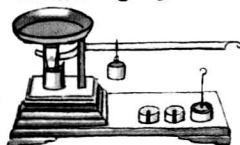
真鍮しんちゅうの小さい分銅ぶんどう

真鍮は銅と亜鉛との合金。分銅は、はかりで物の重さをはかるとき重さの標準として用いるおもり。質量により筒形・釣鐘形などがある。

分銅の種類



上血神秤



貴族院議員

明治時代につくられた大日本帝國憲法により衆議院とともに設けられた一院の議員で、身分の高い家柄の人々を代表した。現在の憲法により、昭和二十二年になくなった。

樺

これ科の落葉高木。山や野に自生し、また庭にも植えられる。材は堅く木目が美しいので、建築や家具によく使われる。

鮎しでなければ解わからないというような通つうをしきりに説とかれた。Aは何時かその立ち食くいをやってみようと考かんがえた。そして屋台の旨うまいという鮎屋しやしやを教おそわっておいだ。

ある日、日暮れ間もない時であつた。Aは銀座の方から京橋を渡つて、かねて聞いていた屋台の鮎屋へ行つてみた。そこには既に三人ばかり客が立つていた。彼はちよつと躊躇ちゆうちよした。しかし思い切つてとにかく暖簾のれんを潜くぐつたが、その立つてゐる人と人との間に割り込む気がしなかつたので、彼は少時暖簾を潜くぐつたまま、人の後ろに立つていた。

そのとき不意に横合よこあいから十三、四の小僧が入つて来た。小僧はAを押し退けるようにして、彼の前の僅かな空きへ立つと、五つ六つ鮎の乗のつてゐる前下まえさがりの厚い樺板＊けやいたの上を忙せわしく見廻みまわした。

「海苔のり巻きはありますか」

「ああ今日は出来ないよ」肥ふとつた鮎屋の主は鮎しを握にぎりながら、なお

ジロジロと小僧を見ていた。

小僧は少し思い切った調子で、こんなことは初めてじゃないというように、勢いよく手を延ばし、三つ程並んでいる鮪の鮪の一つを摘まんだ。ところが、なぜか小僧は勢いよく延ばした割にその手をひく時、妙に躊躇した。

「一つ六銭だよ」と主がいった。

小僧は落とすように黙ってその鮪をまた台の上へ置いた。

「一度持ったのを置いちゃあ、仕様がねえな」そういつて主は握った鮪を置くと引きかえに、それを自分の手元へかえした。

小僧は何もいかなかった。小僧はいやな顔をしながら、その場がちよつと動けなくなった。しかしすぐある勇気を振るい起こして暖簾の外へ出て行つた。

「当今は鮪も上がりましたからね。小僧さんにはなかなか食べられませんよ」主は少し具合悪そうにこんなことをいった。そして一つを握り終わると、その空いた手で今小僧の手をつけた鮪を器用に自分の口へ投げ込むようにしてすぐ食ってしまった。